

“Things” and Phases of Awareness in Formative Expressions: From the Practice of Training Childcare Workers through Going Back and Forth between Production and Reflection

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-03-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 櫻井, あすみ, SAKURAI, Asumi メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1530

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



造形表現における「もの」と気づきの位相

—制作と振り返りを往還する保育者養成実践から—

櫻井 あすみ

キーワード：美術教育，幼児教育，造形表現，図画工作，「もの」，素材，ポートフォリオ

はじめに

筆者は、2021年度より川口短期大学にて、保育者を主に目指す学生に「図画工作」（2年次前期）を指導するにあたり、活動のなかで学生らが幼児期の感覚を追体験し、変化していく素材と驚きや喜びをもって出会うこと、そこから表現したいものや作品の形などが事後的に立ち上がっていくという体験を味わうことに重点を置いてきた。制作のなかで変化していく素材、すなわち「もの」との出会いを重視するこの美術教育観は、筆者が美術制作者として実際に作品制作を行いながら、実感を伴って探究してきた美術制作における学びの質についての考察に基づいている⁽¹⁾。2019年からは私立小学校の図工科講師として、素材との対話を促すような環境づくりや声かけが、子どもの発想や工夫を引き出す上で重要であるということを、教員という立場からも体感してきた。

本研究は、短大での2021年度の授業で、毎回の制作後に取り組みさせたポートフォリオと振り返りのレポート、および期末レポートの内容・記述をもとに、「もの」との出会いを通じて、保育者を目指す学生たちがどのようなことを発見したのか、そのときどのような学びが生じたのかを検証するものである。大量のポートフォリオやレポートを見ていくなかで、そこに記された学生の「気づき」にはいくつかの位相があることが考察された。それは「もの」の発見から自己・他者理解へ至る位相、図工・美術のイメージが変化していく位相、子どもの視点から保育者の視点へ移る位相などである。本論文ではこれらの位相のもとに学生の気づきを整理して、検証していきたい。

Ⅰ. 図工・美術・造形表現における「もの」

平成29年に告示された新学習指導要領は、「もの」と関わる教科としての図工・美術の学びの

特質をより明確にしている。新要領は全科に共通の考え方として「主体的・対話的で深い学び」を打ち出しているが、その学びは「各教科の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら」理解したり、創造したりすることに向かうものと示されている⁽²⁾。図工の場合は「造形的な見方・考え方」にその特質があり、「感性や想像力を働かせ、対象や事象を、形や色などの造形的な視点で捉え、自分のイメージをもちながら意味や価値をつくりだす」で学びあるとされる⁽³⁾。「意味や価値をつくり出す」とは「意味や価値のネットワークの網の目をつくりかえていくこと」すなわち「対象や事象の捉え方をつくりかえること」である⁽⁴⁾。図工で扱う対象や事象は、造形的な活動のなかで関わる素材や環境などの「もの」である。その形や色と「主体的・対話的」に関わることを通じて意味や価値の変容が生じること、それが図工・美術における「深い学び」の基底にある。

幼児期の教育は「人格形成の基礎を培う重要なもの」であり、「幼児期の特性をふまえ、環境を通して行うもの」とされている⁽⁵⁾。造形表現はまさに環境との関わりあいのなかから人間形成を促すものである。幼児教育（幼稚園・保育所・認定こども園）における「造形表現」は、指導の五領域（健康・人間関係・環境・言葉・表現）のうちの「表現」のなかに、音楽や身体表現らとともに位置づけられている。「表現」は「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」ものとされ、造形表現はそれを造形的な活動を通して行う。しかし小学校以降の各教科と異なり、幼児教育において五領域は「相互に関連を持ちながら次第に達成に向かうもの」であり、「幼児が環境に関わって展開する具体的な活動を通して総合的に指導されなければならない」とされている。つまり、造形表現の活動はその他の領域の育成にも関わっており、特に「周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもって」関わる「環境」の領域に大きく重なっている。造形表現は、「造形的な活動を通して、素材や環境（もの）に好奇心や探究心をもって関わりながら、感じたことや考えたことを自分なりに表現する」ものであるといえるだろう。

川口短大では1年次に「保育内容（表現・造形）Ⅰ・Ⅱ」で造形表現の基本的な考え方や実践を学び、「図画工作」でさらに幅広い制作を行う。「保育内容（表現・造形）」を担当する木谷安憲は、学生が自身の「子ども心」を思い出す経験が子どもへの共感につながると考え、子どもに戻ったつもりで絵を描かせる活動などを行っている⁽⁶⁾。こうした木谷の問題意識は筆者とも共通するが、大人が固定観念を取り払い、意識して子どものような発想を取り戻すのは容易なことではない。そこで「図画工作」では、「もの」との出会いに重点を置いて「子どものような発想」をあらかじめ意識しすぎないように留意し、変化していく形や色から事後的にイメージが生成しやすく、驚きや喜びをもって世界と関わっていた幼少期の感覚を追体験できるような活動を設定するようにした。

Ⅱ. 語りかけるポートフォリオ

ここで、筆者が短大生に制作させたポートフォリオについて解説したい。ポートフォリオとは、もともと書類などを入れるカバンやバインダーのことであったが、美術の分野ではアーティストが自分の作品の写真などをまとめたものをポートフォリオと呼ぶ。学校教育の現場では、一人の子どもの学びの過程の記録や成果物などをまとめたものがポートフォリオと呼ばれる。それによって活動の過程における子どもの学びを形成的・多面的に評価できるとともに、教師が自分の指導の在り方を振り返ることに活用できる⁽⁷⁾。また、図工・美術の授業で子どもが自らのポートフォリオを制作することは、それまでの活動を振り返りながら次に活かすというように、学びに連続性をもたせ、意欲を高めることにもつながる。それには、スケッチブックに写真やプリントなどを貼っていく方法や、一つの題材の写真や記録、振り返りを一枚の紙にまとめていく方法⁽⁸⁾などがあり、近年ではタブレットで随時写真を撮り、めあてや振り返りの書き込みとともにWEB上に配置し、活動の記録を残していく「eポートフォリオ」の活用も進められている⁽⁹⁾。

筆者が短大生に取り組ませたポートフォリオには、活動を振り返ることで学生の学びを深めるねらいと、教員として形成的な評価の材料を得るため、教育の効果や改善点を検証するデータを蓄積するためという3つの側面があった。そもそもポートフォリオを取り入れたのは、コロナ禍によって図工室に入れる学生数に制限がかかり、学生を半分に分けて対面授業とリモート授業を毎週交互に行わなければならなくなったことがきっかけであった。対面授業後のポートフォリオ制作であれば一人でも学習を深められると考え、リモート週の自宅課題にした⁽¹⁰⁾。ポートフォリオの内容は、A4の紙一枚に一つの題材の制作過程と完成作品の写真レイアウトし、そこに題材の説明や、制作過程での「気づき」などのコメントをそえるという形式をとった。デザインの学びにもつながるよう、文字の色やイラストの工夫、色紙を貼るなど、目で見て分かりやすく、楽しさが伝わるように作成するように指示した。さらに重要なしかけとして、そえるコメントは「保育者として子どもに題材を紹介する気持ちで、やさしい言葉で、語りかけるように」記入するというルールを設けた。そうすることで、制作中にも「こんなとき、保育者だったら子どもにどんな声をかけるか」という意識が働くのではないかと。すなわち、子ども時代の追体験としての「気づき」と、未来の保育者としての「気づき」という2つの位相が錯綜しつつ、学びが深められるのではないかと期待があった。ただこの方法だと詳しい振り返りを記述するスペースがとれないため、別のA4のレポート用紙に振り返りと考察を記入させ（こちらは学生としての言葉での記述）、ポートフォリオとレポートが見開きになるようにクリアブックにファイリングさせていった（写真1）⁽¹¹⁾。

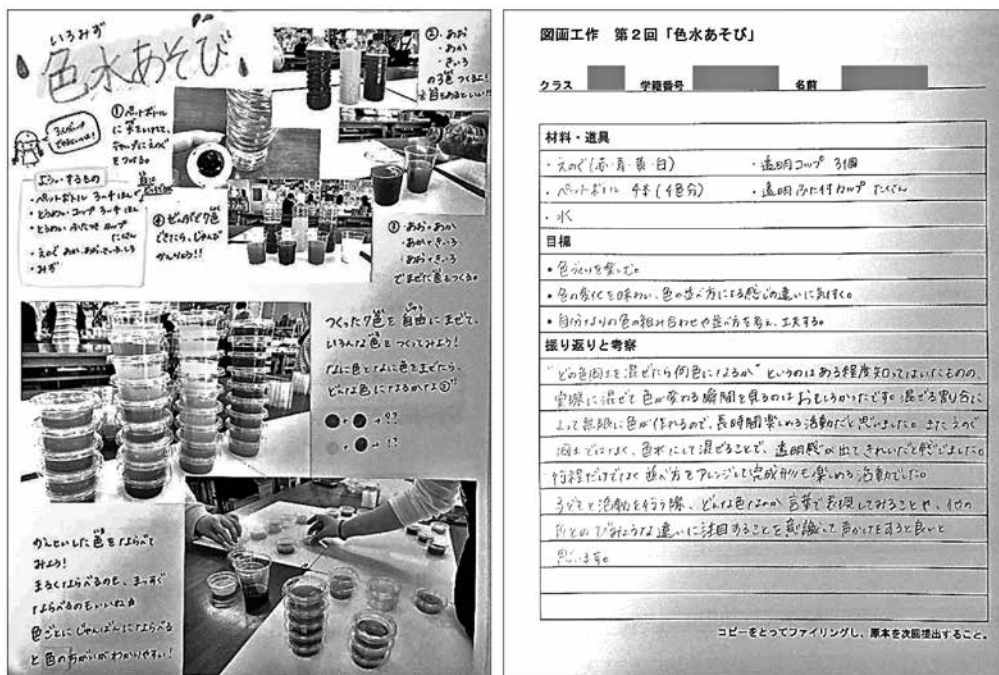


写真1

Ⅲ. 「もの」の発見から自己・他者理解へ

造形表現や図工・美術のなかで生じる学びは、素材や道具、環境といった事物を媒介してなされるという点に大きな特質がある。造形表現活動の過程において、素材や環境は自己の働きかけに応じて刻々とその見え方や意味づけを変容させていく。このように、事物が日常的に付与されていた意味や役割を逸脱し、多義的な様相をあらわにしている状態を、ここでは特に「もの」と呼ぶ。「もの」との出会い・気づきを通じて、それまで主体が抱いていた固定的な観念は揺るがされ、それが自己と他者への新たな気づきをも触発していく。美術教育の実践において、このように、「もの」を媒介とした様々な気づきが実際に生起しているかを振り返ることは重要だろう。筆者が短大生に行った図画工作の授業のなかで、こうした気づきは生じていたのか。生じたとするならば、それはどのように生じていたのか。先述したポートフォリオの写真、振り返りレポートや期末レポート⁽¹²⁾への記述をもとに検証していきたい。

1. 予想外の出会い

「もの」への気づきは、予想外の出会いとしてもたらされる。乳幼児期の子どもがなぐり描きを

するとき、それはまず手の運動を通じて紙や描画材の感触を味わう探索行為として現れ、事後的に偶然できた描画材の痕跡に気づき、既知のものイメージが投影され、意味づけられていく⁽¹³⁾。乳幼児のなぐり描きはまだ意味づけが固定化されていない未分化なものであり、行為の意図せざる結果として、驚きを伴って乳幼児の前に出現する。こうした感覚を学生に追体験させるために、偶然選んだ2色のクレヨンを用いて、目を閉じたままなぐり描きを行い、目を開けたときに出現する形と色を味わう（その後で思いついたものを自由に描き加える）という実践を授業の導入として行った（「なぐり描きで描いてみよう」写真2）。この振り返りには、「意図せずに選出した色を使い、丸や点、線などを適当に描いていただけても…一つの綺麗な作品のように感じられました」「違う色の方が良く描けるのではないかと思っていたけれど…思っていたよりも明るい作品になったので驚きました」など、最初は不安だったが、できた作品が予想よりもきれいで驚いたという記述や、子どもの頃の気持ちを思い出せたなどの記述がみられた。

折り紙を折って自由に切り開いてできた切り紙を、紙テープ上に貼りつけて吊るす「折り紙かざり」（写真3）の活動では、「奇妙な形のものや紙が繋がらずバラバラになってしまったものもあった。だが、“こんな形ができるんだ”という新しい発見になったり、他の折り紙飾りを重ねたりするとオシャレな雰囲気になったりした」など、予想と異なる形との出会いを驚く姿、複数の折り紙の重ね方や並べ方によって見え方が変わることに気づく様子が伺えた。また、赤・青・黄・白の色水を、蓋つきのプラスチック容器内で混ぜてたくさんの色を作り、並べたり積んだりする「色水あそび」のポートフォリオには、「いろがかわった！！」と色の変化に注目する様子が描かれ（写真4）、レポートには「私たちから見ると「赤と白が混ざるとピンクになる」ということはあたりまえです。しかし、子どもたちからしたら見たことのない光景であり、新たな世界を経験している、ということ」「色の変化が子どもたちにとっては魔法のような感覚なのではないか」などの記述がみられた。基本的な混色の知識があるにもかかわらず、色が変わる瞬間の不思議さ、多様に変化していく微妙な色の違いを、子どものように発見する様子が表れている。

2. 美しさの発見

「もの」との出会いは、しばしば美的な感動を伴う。ポートフォリオには、「折り紙」が「たいようにあたるとかげもきれい」（写真3）、「色水」を「ひかりにあててもきらきらきれい」（写真4）など、発見した美しさへ注目を促すコメントが残されている。レポートでも、感受した対象の美しさを自分なりの言葉で描写する記述がみられた。ペットボトルなどの透明容器に色や模様をつけ、スマートフォンのライトで色々な角度から照らす「光であそぶ」⁽¹⁴⁾（写真5）の活動では、「映し出された色や形は、物に塗った色よりもほんやりとした色や形になっていて、少し幻想的な雰囲気、きらきら輝いていてきれい」といった描写や、「水を入れると、光に映し出された部分



写真2



写真5



写真6



写真3



写真4

が波のように光り輝いて見えました」などの比喩表現に実感が込められている。ポートフォリオにも、「からふるなみずたまりみたい」（同写真）などの比喩が多く使われていた。

3. 身近なものの再発見

「もの」の美しさに気づくこと、それは新しい見方の発見であり、対象に新しい意味が生成する瞬間でもある。それは何かを作る過程だけでなく、身近なものや景色をあらためて注視したり、気になるものを写真に撮ったり、それを見返したりするなかで促されることもある。自分の好きな形・色を身の周りで探し、集めた写真で子どもへの自己紹介を作る「好きな形・色で自己紹介」（写真6）の活動後のレポートでは、「普段はあまり気にせずに見ている景色や物も、意識して見てみると、とてもきれいに見えたり、違って見えたりする」などの気づきが書かれた。

身近なものへの新たな気づきは、美しさの発見以外に、素材に固有の特徴や性質、通常の用途を離れた活用法の発見などもある。小麦粉に水を加えて粘土を作る「小麦粉ねんど」（写真7）では、「小麦粉にふれるととてもサラサラしていて、気持ちがよく、水を入れると固まるという性質が身近で触れるととても不思議な気持ちになった」、協力して新聞紙の衣装を作る「新聞紙でへんしん」（写真8・9）では、「新聞紙を細く丸めたり、ぐしゃぐちゃ（原文ママ）にしてみたり、きれいに折ってみたりと、同じ材料なのに色々な形や雰囲気になることが面白い」など、身近なものの性質の変化に驚く様子がみられた。「何でも作れるすぐれもの」「発想次第では洋服まで作ることができたりと変幻自在でおもしろいもの」というように、素材としての新聞紙の万能さに気づく記述も多かった。色紙にローラーや身近な材料のスタンプを用いて模様を作る「絵具あそび」（写真10・11）でも、「プリンのカップは底が花のような形なのでそのままスタンプするだけでかわいかったり、洗濯バサミは角度を変えながらスタンプすることで星や桜のような花になった」と、身近なものからおもしろい形を生み出せることへの驚きがみられた。

4. 身体・感情・好みの発見

こうした「もの」への気づきが、自己への気づきをどのように促すのか。まず、「新聞紙」で「豪快に折って、切って、つなげてという作業が体全体を使った動きで楽しく感じました」という感想のとおり、造形表現は身体的な活動であり、いまここにある自己の身体をあらためて確認することにつながる。「なぐり描き」の体験で「目を閉じて描くことで今までは感じることのなかった、スケッチブックのザラザラ感や滑る感覚を味わうことができました」というように、それは素材や道具との五感を通じた関わりを経由して、自己の身体へと折り返してくるような活動である。

また、造形表現は「失敗したらどうしてなのかを考えたり、その形になるように切ったら成功

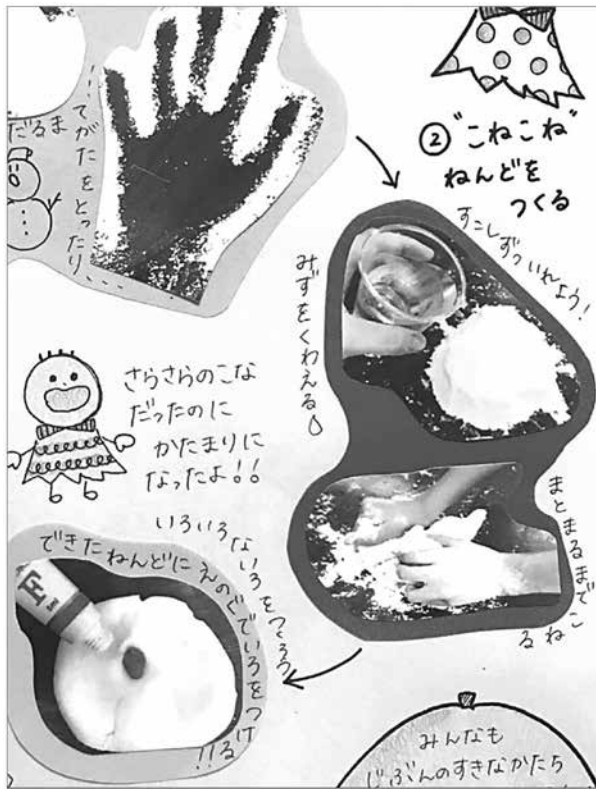


写真7



写真8



写真9



写真10

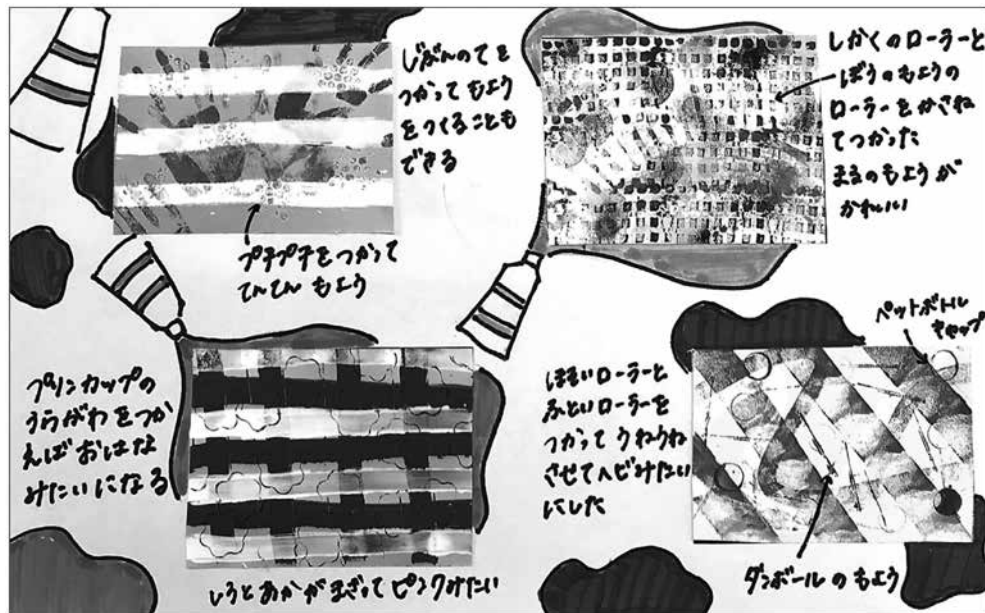


写真11

した喜びだったり、偶然できた形の驚きだったりとさまざまな感情を味わうことができる」（「折り紙」）というように、様々な感情の変化を主体にもたらず。さらには「作品を作っていく中で、言葉では表現が難しいような感情になる」（期末）など、ときにそれまで出会ったことのないような、言語化不可能な複雑な感情にも気づかせる。

「好きな形・色」では「自分の好みを改めて知ることができて楽しかった」など、それまで意識していなかった好みに気づかされたという声が多くあった。好きなものを選んだのだから当然ともいえるが、「完成して見てみると、似た雰囲気のものが集まったと気づきました」というように、あらためて並べて可視化することでそれまで気づかなかった傾向への気づきにつながっていた。「絵具」での「色々なスタンプやローラーを試しながら、自分の好きな色の組み合わせや形を見つけることも楽しかったです」という記述にも表れているように、自分の好みや美的感覚を発見する経験は、偶然の形や色のなかから、良いと思うものを判断・選択し、作品にしていく過程で積み重ねられていく。そして様々な題材・素材でいくつも作品を作っていくなかで、また、それらを事後的にポートフォリオにまとめて振り返るなかで、その気づきはより深まっていた。

5. 新しい発想や工夫

自分なりの発想や工夫ができたと感じること、それもまた新しい自己との出会いである。新しい発想は「できた形や線から「○○に似てる」「○○みたい」と思えるのはなんだかすごい」（「なぐり描き」）と学生が感じたように、しばしば「もの」に触発されながらもたらされる。「思い切ってやってみると、できた形からイメージが湧いてどんどんと作ることができた」（「絵具」）などの記述からは、完成のイメージがあらかじめなくても、作るなかで変化していく形・色から発想が連鎖的に生じていく様子が伺える。

新しい工夫、すなわち、素材やイメージに応じた技術の開発・習得についても同様のことがいえる。授業では基本的な道具の使い方や素材の生かし方などを説明してから制作に入るが、振り返りの記述を見ると、学生たちがそうした説明を知識的に理解しただけでなく、実際に素材や道具と触れあうなかで自分なりの工夫として技術を生み出し、習得している様子が見受けられた。「ローラーをころがすときの力加減やカーブの大きさ等で、色々な印象のものができるのがおもしろかった」（「絵具」）、「ガムテープを使うと比較的とまりやすく、セロハンテープを使うと強度は弱いけど目立ちにくいということが分かりました。さらに…上の部分だけをホチキスでとめると、下の部分は広がり、ドレスを作る際にすごく役立ちました」（「新聞紙」）などの記述には、色々な道具の使い方を試しながら無意識に技術を習得している様子が表れている。ローラーの力加減や、テープとホチキスの使い分けなどは簡単に説明してはいたが、これらの記述からは、その効果を自らの気づきとして実感した上で、活用していることが伝わる。また同じく「新聞紙」

の「力を強く入れるとすぐに破けてしまったり、素材が固いので、思うような形にするのが難しかったですが、難しい素材だからこそ、工夫することができて良かった」という記述や、ポートフォリオに示されたスカートをふくらませる独自の工夫などからは（写真8）、素材の制約との格闘が様々な工夫を生み出していたことが伺える。

6. コミュニケーションの生成・他者からの触発

授業のような集団での制作活動では、「アイデアを出し合うことで自然と話すことができたり、活動をきっかけに人間関係が築けたり、絆ができる」（期末）と学生が感じたように、制作を介した他者とのコミュニケーションが生じる。特に「新聞紙」は共同制作のため、衣装のテーマを話しあったり、一人では着られない衣装作りを自然と助けあったりする姿がみられた（写真9）。また、「自分とは違う考えを持った友達の作品をみるとこんなやり方もあるんだとたくさんの発見をする事ができ、自分の中にある想像力だけでなく、友達の想像力を知る事ができ、次はこの方法も試してみたいなと感じる事ができました」（期末）というように、個人の制作でも他者の作品から触発された発想や工夫を試す様子がよくみられた。「絵具」の活動では「1人の生徒が「手型やっついていい？」と聞いたことがきっかけで、他の友達もやっていました。思わぬところに材料や道具になるものがあると気付くことができました」という記述の通り、当初は指導しなかった「手型をとる」という工夫が学生のあいだで自然発生し、あちこちに広まるという現象が生じた。それは、同じ空間でともに制作することを通じて、他者との対話と、他者から触発された発想が同時生成する瞬間だった。その喜びは、手型に挑戦した学生のポートフォリオの多くに記録されていた（写真10）。

7. 他者との差異・個性の尊重

他者の制作の過程を目にしたたり、作品やポートフォリオを鑑賞したりすることを通じて、自己と他者との差異が鮮明になることは、それぞれが異なる個性を有した別の人間であることへの気づきを促す。先に「好きな形・色」の活動で、「似た雰囲気のものが集まった」と好みを自覚した学生の記述を紹介したが、それは自分が集めた写真を他の人たちの写真と並べて見ることで、その雰囲気の違いがより際立ったことの結果でもある。そうした個性は、自覚できるような好みにとどまらない。「なぐり描き」や「折り紙」のように何も考えずに手を動かすところから始まるような制作であっても、「みんなが描いた作品を見て、一人一人の個性が出ていると感じました」「折り紙をたくさん残しているものが多い人、細い線で細いデザインの人、切った中心部分じゃなくて外側を作っている人など、それぞれの工夫なども見ることができました」と感受されるなど、身体や感覚や育ちの違いから自然と生じてしまうような、逃れようのない個性でもある。このよ

うな経験の積み重ねから、「少しの工夫が人それぞれの個性となり、1つの作品として残る」という点に造形表現特有の「面白みを感じ」たり（期末）、また、「表現活動を通し、子どもたちは自分の表現したいことは自由でいいのだと感じられるようになると考えます。その感覚は表現活動だけでなく、障害を持つ人や外国籍の人等の様々な人や文化を柔軟に受け入れられることに繋がります」（期末）と考えるなど、異なる他者を尊重しようとする深い考察も生じていた。

Ⅳ. 図工・美術イメージの変化

幼児期にはほとんどの子どもが絵や工作を好むが、思春期頃から他者と比較して上手に作れない、恥ずかしいという意識が芽生え、図工・美術に苦手意識を持つ人が増え始めるといわれる。得意・不得意にかかわらず図工を教える必要のある小学校教員や保育者を志望する学生の、およそ6割以上が図工・美術に苦手意識を持っているという実態調査もある⁽¹⁵⁾。実際に筆者が学生たちに尋ねた際にも、これらの調査に近い割合の学生が苦手意識があると答えた印象であった。

では、「もの」との関わりを重視した造形表現活動を経て、保育者を目指す学生たちが抱く図工・美術イメージに変化はあったのだろうか。彼らは幼児期の造形表現、および図工・美術という教科の特質をどのようなものと理解したのだろうか。期末のレポート課題に設けた「これまでの授業での活動を振り返り、図画工作に対するあなたの意識がどのように変化したかを述べなさい」という問いの解答を見ながら考察していきたい。

1. 過程の重要性

以前は図工に苦手意識があったが、授業を通じて楽しむことができるようになったという学生には、「以前の図画工作のイメージは…作業のようなものとして認識していました。しかし、実際に体験した図画工作では仲間と案を出し合ったり、ものの変化や意外性に驚き気持ちや体験を共有したりすることや…作るまでの過程をも楽しむことができると学びました」というように、作る過程の重要性を意識する記述が多くみられた。こうした学生はそれまでの図工・美術に対し「作業のようなもの」「結果重視」「作品や評価を重視」などのイメージを持っていたが、ものの変化に対する驚きや発見を味わったり共有したりする体験をすることで、「過程が重要」「実験のようなもの」といった意識へと変わっていた。「実験」という言葉からは、見るもの、触れるものすべてが新鮮で興味の対象である乳幼児のように、活動を通じて対象を探り、新たな面を発見していくことが重要であるという意識の変化がみてとれる。

2. 自由・ありのままの肯定

制作を「実験」と考えることは、「今までは…自分の不器用さが恥ずかしく、自分の思うような作品を作る事ができませんでした。が、授業をやっていくうちにどんどん…失敗しても良いから自分の感じた通り思った通り、やってみたいと思うようになり、楽しいと感じられようになりました」という記述のように、失敗を恐れるよりも色々な方法を試してみる方がよい、という価値観につながっていく。試すなかで当初の計画とは異なるが良いものができたという経験が積み重ねられていくと、「…「思っていたものにならなかったけれど、面白い作品になった」「さらにここを工夫してみよう」などと考えられるようになり、作品を自由に作ることを楽しむことができるようになりました」というように、「自由に」「思いのまま」「ありのまま」行動することを互いに肯定しあうような価値観も醸成されていくことが伺えた。

3. 正解のなさ

ともに作る活動が互いの個性や多様性を尊重する意識につながることはすでに述べたが、そこからさらに、「人それぞれ自分の見方や考え方によって作り出すものは違って当然であるということが分かりました。そのため、この授業を受けてからは図画工作に対する意識は、上手い下手は関係なく自分の個性を自由に表現出来るもの、正解のないものというように変化しました」というように、図画工作は「上手い下手」で評価が決まるのではなく、「正解のないもの」であるという意識へと変化していく記述も多くみられた。

このように、図工・美術への苦手意識を克服した学生たちは、「もの」との関わりを重視した造形表現活動を経て、図工・美術の特質を「実験のように過程が重要で、自由で、正解がないもの」と意識することによって、活動を楽しめるようになったという傾向が見受けられた。

V. 子どもの視点から保育者の視点へ

続いて、学生たちが様々な活動を経て、未来の保育者として活動を子どもに提供する側の視点へと移行できたかについて、「語りかけるポートフォリオ」制作の効果も含めて検証したい。筆者は「子どもの気持ちに寄り添い、深い学びを導く活動を計画・指導する方法を具体的に考えられる」ことを授業の目標の一つとして、初回授業で説明した。「子どもの気持ちに寄り添い、深い学びを導く」とは具体的には、「もの」と出会う驚きや作る喜びという感覚の追体験を経て、子どもの気持ちや表現に共感し、さらに新しい発見へと導くような声かけができることであり、「活動を

計画・指導する方法を具体的に考えられる」とは、子どもの目線にたち、子どもが楽しめる題材や素材、安心して自由に活動に取り組める環境などを提供できることである。

ポートフォリオのコメントには、「どうなるかな?」(写真4)「さらさらのこなだったのにかたまりになったよ!」(写真7)など、子どもに注目を促したり、美しさや楽しさを子どもと共有しようとする声かけが数多く書かれている。しかし「毎回作成していたポートフォリオでは、初めはよく理解できずにやっていた部分もありました」(期末)というように、最初はこうしたコメントをどう書けばよいかわからず、戸惑う様子がよく見受けられていた。だが作品制作とポートフォリオ制作を繰り返すうちに、「…ですが、子どもに分かりやすく伝えるにはどうしたらいいのか、どんな部分がポイントで楽しめるのか、実際にやる時はこうした方がいいのではないかなど考えることができるようになり、振り返る事の大切さを学びました」と変化していったようだ。

実際、振り返りが充実している学生のポートフォリオのコメントは、まるで目の前にいる子どもへ心から語りかけるように、どれも生き生きとしている。期末の「目指す保育者像」を問う設問でも、「活動の楽しさを自分自身がよく知った上で、子どもの目線に立ち、説明の仕方や使う言葉、環境構成や材料を工夫する事が必要だと思います。作っている間には、材料の色や形についてや子ども自身が気づいていないいい表現を伝えられるようにしたいです」「子どもと一緒に活動を楽しみ、子どもが主体的に取り組めるよう工夫が考えられる保育者を目指したいと思いました。…失敗という認識を子どもに与えないよう自信に繋がる言葉掛けも工夫できる保育者を目指したいと思いました」など、活動を提供する側としての工夫を意識するような変化がみられた。

さいごに

半年間の授業を振り返って、まずは「幼児期の追体験として「もの」と親しみ、造形表現の楽しさを子どもの気持ちで理解する」こと、そして「毎回の活動の振り返りを通して、保育者としての視点を考える」ということの往還が、学生に多様な位相の「気づき」をもたらしており、その学びを深めたといってよいのではないかと、いう現時点での結論を得た。それは、学生が造形表現を楽しみ、子どものときの気持ちを思い出して終わる学びではなく、また、最初から保育者の視点で授業にのぞみ、現場ですぐに役立てられるようなノウハウを得ようとするような学びでもない。「子ども」と「保育者」のまなざしが学生のなかに共存し、交錯することを通して、本当の意味で子どもに寄り添った活動を考えられるようになっていくといえるのではないだろうか。

とはいえ、幼児教育の造形表現は子どもの発達段階に合わせた内容になっており、短大生や大学生にとっては簡単で楽しみやすいものがほとんどである。しかし小学校以降の図工・美術教育では自分の表現をより深く探究したり、より高度な技術に挑むという場面がある。「上手・下手」

という一元的な尺度ではないにせよ、その探究の過程や最終的な作品の質は評価の対象にもなってくる。そうした場面での子どもの理解や対応、評価について考えることは、学校教育における美術教育を考える上では避けて通ることができない。保育者養成ではそこまで求められないとしても、そうした側面をまったく無視した図工・美術のイメージを、未来の保育者に抱かせてしまうことに問題はないだろうか。このことは今後の課題としていきたい。

《注》

- (1) 美術制作の過程で開かれる「もの」の「他者」性によって促される贈与的省察については、櫻井あすみ(2018)を参照。また、筆者の美術教育に対する考察は、「教育空間におけるモノとメディア——その経験的・歴史的・理論的研究」(2015-18年度、今井康雄編(2021)を参照)および「判断力養成としての美術教育の歴史的・哲学的・実践的研究」(2018-20年度、小松佳代子編(2021)を参照)という2つ科研究費研究への研究協力の経験も基盤となっている。
- (2) 新野孝則・福岡知子編(2019), pp.14-15。および、文部科学省(2018a), p.77。
- (3) 文部科学省(2018b), p.11。
- (4) 新野孝則・福岡知子編(2019) p.21。
- (5) 文部科学省(2018c)。
- (6) 木谷安憲(2017)および(2020)。
- (7) 福田隆真ほか編(2010), p.198。
- (8) 新野孝則・福岡知子編(2019), p.84。
- (9) 波多野達二(2020), 塩川水月・芳賀正之(2021)。
- (10) ポートフォリオ導入にあたっては、北沢昌代ほか編(2019)に掲載されている「造形ノート」(pp.10-13)を参照したが、その内容は題材名やねらい、制作過程や作品の写真に、あくまで学生の視点での振り返りと考察をまとめたものであった。また、2022年度は隔週でのリモート授業はなくなったが、前年度の活動を踏襲し、図工室でポートフォリオ制作を行わせている。
- (11) 本来はこのファイル自体をポートフォリオと呼ぶべきであるのだが、便宜上、今後単に「ポートフォリオ」と述べるときには、写真とコメントをまとめた左側の一枚のみを指す。また、ポートフォリオとレポートは、毎回の課題ごとに写真に撮って画像で提出させており、筆者はそのすべてのデータを保存している。実物のポートフォリオとレポートを取めたファイルは、今後の学びに役立てられる貴重な資料として、学生本人の手許にある。
- (12) 「1. これまでの授業での活動を振り返り、図画工作に対するあなたの意識がどのように変化したかを述べなさい」「2. 乳幼児期において造形表現活動がなぜ大切かについて、あなたの考えを述べなさい」「3. 1,2をふまえて、あなたの目指す保育者像について述べなさい」の3問を出題した。
- (13) 北沢昌代ほか(2019), pp.23-24。
- (14) 2022年度は「光の世界」に改題。
- (15) 小学校教員志望の学生については降旗学(2021)、保育者志望の学生については北沢昌代ほか(2019) p.16。

参考文献

- 磯部錦司編(2018)『造形表現・図画工作〔第2版〕』建帛社
 今井康雄編(2021)『モノの経験の教育学——アート制作から人間形成論へ——』東京大学出版会
 大橋功ほか編(2009)『美術教育概論(改訂版)』日本文教出版
 大橋功ほか編(2018)『美術教育概論(新訂版)』日本文教出版

- 笠原広一編 (2019) 『アートがひらく保育と子ども理解——多様な子どもの姿と表現の共有を通して——』東京学芸大学出版会
- 北沢昌代ほか編 (2019) 『子どもの造形表現——ワークシートで学ぶ——第2版』開成出版
- 木谷安憲 (2017) 「保育者になる学生が小学校各学年の図工教科書の図画を描く——保幼小連携を考えるきっかけとなるプログラム——」『川口短大紀要』第31号, pp.93-105
- 木谷安憲 (2020) 「自分の子ども心に触れる描画活動「かいてみよう子ども心」——子ども心で描いた大人の絵と園児の絵——」大学美術教育学会『美術教育学研究』第52号, pp.145-152
- 国立教育政策研究所教育課程研究センター (2020) 『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料——小学校 図画工作——』東洋館出版社
- 小松佳代子編 (2021) 『判断力養成としての美術教育の歴史的・哲学的・実践的研究』科研費研究成果報告書
- 櫻井あすみ (2018) 「「贈与」としての美術・A B R」小松佳代子編『美術教育の可能性——作品制作と芸術的省察』勁草書房, pp.201-227
- 塩川水月・芳賀正之 (2021) 「美術教育におけるeポートフォリオの活用」『静岡大学教育実践総合センター紀要』第31巻, pp.169-178
- 新野孝則・福岡知子編 (2019) 『明日の小学校教諭を目指して 子どもの資質・能力を育む 図画工作科教育法』萌文書林
- 波多野達二 (2020) 「図画工作科における苦手意識克服に向けたポートフォリオの活用について——タブレットを使った図工ノートの指導を通して——」『佛教大学教育学部学会紀要』第19号, pp.105-120
- 樋口一成編 (2018) 『幼児造形の基礎——乳幼児の造形表現と造形教材——』萌文書林
- 福田隆真ほか編 (2010) 『美術科教育の基礎知識』(四訂版), 建帛社
- 降籙学 (2021) 「図工・美術の苦手意識をなくす教育方法の研究——教員養成課程における実践的研究の成果——」『山形大学紀要(教育科学)』第17巻 第4号, pp.273-290
- 楨英子 (2008) 『保育をひらく造形表現』萌文書林
- 文部科学省 (2018a) 『小学校学習指導要領解説(平成29年告示) 総則編』東洋館出版社
- 文部科学省 (2018b) 『小学校学習指導要領(平成29年告示) 解説 図画工作編』日本文教出版
- 文部科学省 (2018c) 『幼稚園教育要領解説』フレーベル館
- 吉川昌宏 (2006) 「図画工作科におけるポートフォリオの実践状況に関する研究」『美術教育学:美術科教育学会誌』第27巻, pp.415-427

(提出日:2022年9月22日)